

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380193

研究課題名(和文) 戦後の米欧関係におけるアメリカ広報文化政策の実態と影響の解明

研究課題名(英文) The US public diplomacy and its impact on the postwar international order in Europe

研究代表者

齋藤 嘉臣 (Saito, Yoshiomi)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：10402950

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：近年の欧州統合史・安全保障史に関する研究成果を基盤として、英米の広報文化政策やNATOによる広報文化政策の実態を解明した。その結果、1950年代以降、同盟の存在正当化が軍事的観点のみからなされることはなくなり、代わりに政治的協議の場としての機能や欧州統合を進める基盤としての役割、データを進める基礎としてNATOが自らを表象し始めたことを明らかにした。一連の考察は、戦後欧州におけるアメリカニゼーションの影響について考察を進める必要性を感じさせるものとなった。そのため、欧州社会においてアメリカが表象したものを、社会思想史・文化史的観点からも考察した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to investigate the US (as well as the UK and NATO) public diplomacy and its impact on the postwar international order in Europe. It revealed that since 1950s NATO started to legitimize its existence not exclusively from military rationale, but from broader standpoints, publicizing its goals as a basis for political consultation and European integration and promoting detente with the East. Also this research reconsidered the impact of the cultural Americanization process on the postwar Europe from the viewpoint of social thought and cultural history.

研究分野：冷戦史、外交史

キーワード：冷戦史 文化外交 国際政治史

## 1. 研究開始当初の背景

近年活発に行われている欧州秩序史研究によって、欧州統合や北大西洋条約機構 (NATO) 形成を促した政治・経済・軍事的要因の重要性が明らかにされ、地域秩序の多層的な構築ダイナミズムに対する理解が深まっている。研究代表者はこれまでの研究過程において、冷戦の進展と欧州統合問題が交錯しながら戦後欧州の地域秩序を構築してきたことを明らかにし、NATO と EEC/EC の機能分担が戦後西欧における安定した地域秩序の基礎になったことについて、主に欧州側の視点から研究を行ってきた。

しかしながら、これら欧州の地域秩序を下支えた米欧各国の広報文化政策 (たとえばマーシャル・プランの広報やアメリカ国務省・広報文化庁 (USIA) による欧州各国での活動、NATO の広報文化政策等) と、その欧州秩序への影響という、地域秩序の多面的な理解の構築に不可欠な観点については、重大な研究上の空白となっている。

戦後の欧州におけるアメリカ政府の活動に焦点を当てた研究は、NATO 成立や欧州統合への政府の期待を分析するものが多く、アメリカ文化の影響についても社会史的観点からその受容と反発の実態を史的に追ったものに単純化されているのが現状である。

このような状況に対し、本研究は戦後欧州 (東西含む) における米英の広報文化活動、その理念の内実と変容過程、NATO の広報文化政策、欧州側の反応の分析を通して、戦後の欧州秩序に影響を与えた文化的基盤を検討することにより、戦後欧州史を再検討することを課題とした。地域秩序の萌芽期である今日の東アジア情勢に鑑みても、制度発展史を超えた政治・軍事・経済・文化領域が重層的に交錯する地域秩序の体系的な理解を構築することは大きな課題である。

戦後の欧州秩序の構築過程については、これまでに外交史的な研究が国内外で活発であるが、一次史料に基づき広報文化政策の視角から当該問題にアプローチする研究はそれほどなされていない。

## 2. 研究の目的

上述の通り、近年、欧州統合史・安全保障史に関する経済史・軍事史・外交史的な観点からの活発な研究がなされている。しかし、米欧の軍事同盟 (NATO) 構築過程や西欧の経済的結束 (EEC/EC) の進展に関する研究の蓄積に比較して、それを下支えた文化的基盤には焦点が当てられてこなかった。本研究は、これまでの研究の蓄積を基盤にしながらか進められるもので、欧州の地域秩序を下支えた広報文化政策に着目し、その欧州秩序への影響を歴史実証的に解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

具体的に本研究は、歴史学的手法により、下記の研究内容によって目的の達成を図った。第一に、欧州秩序を支えた広報文化政策の実態と、その理念の形成および変容過程を解明する作業である。第二に、広報文化政策が欧州秩序へ与えたインパクトを解明する作業である。双方とも正確な事実把握のため、積極的な史料収集に基づく分析作業となった。具体的には、【A】トルーマン・アイゼンハワー政権期の同盟に対する広報文化政策の実態解明、【B】上記政策の影響解明を行った。

### 【A アメリカや同盟機構の広報文化政策の実態とその理念の変容過程の解明】

戦後アメリカ政府内で協議された対欧州政策を社会思想史・外交史的観点から考察した。第一にトルーマン・アイゼンハワー政権における心理戦政策と広報政策の立案過程と、その背後にある理念としての「アメリカニズム」を、1940年代後半と1950年代前半を中心に検討した。第二に同時に、同政策の理念となった「アメリカニズム」の内実が、1950年代以降のアメリカ社会の変容とともに変化し、政策に影響を与える様相を検討した。

また、イギリスについても同様の観点から研究を進め、特に NATO の広報政策の論理について検討を進めた。

### 【B 上記広報文化政策の欧州における影響と欧州側の反応、欧州秩序への影響の解明】

第二の局面では、上記の分析を通して行われる英米および NATO による広報文化活動の動機解明を基盤にして、欧州統合や西側同盟体制が NATO を中心に構築され社会に受容されていく過程について、1940年代後半から1960年代を対象の中心として行った。特に大西洋同盟に関して欧州各国の政府・社会に与えたインパクトを解明した。これら地域秩序の構築過程における文化的要因の役割を分析することで、地域統合と同盟構築に際する文化的基盤の実態を解明した。検討の結果、一連の広報文化政策が、欧州秩序を下支える素地を提供した実態が解明され、軍事・政治経済的要因からのみ考察されてきた従来の欧州秩序認識を批判的に検討した。

本研究は地域秩序の多層的な実態を解明すべく、研究代表者がこれまで進めてきた研究課題を基礎にするものであった。その上で、上述の通り、戦後欧州史を包括的に理解するためには、これまで焦点の当たらなかった、欧州統合と西側同盟を支えた社会文化領域における要因を分析することが不可欠であり、欧州地域秩序を下支えた文化的基盤を解明することの重要性を指摘した。さらに、

軍事領域と政治経済領域と社会文化領域との間の相互作用についても解明した。

#### 4. 研究成果

近年の欧州統合史・安全保障史に関する研究成果を基盤として、軍事同盟(NATO)構築過程を支えた文化的基盤の構築過程を明らかにした。

当該作業は、主に英米の広報文化政策や NATO における広報文化政策の実態を解明することを通して進められた。その結果、1950年代以降、同盟の存在正当化が軍事的観点のみからなされることはなくなり、代わりに政治的協議の場としての機能や欧州統合を進める基盤としての役割、デタントを進める基礎として NATO が自らを表象し始めたことを明らかにした。その研究結果は、「大西洋同盟の文化的基盤 NATO の発信するテキストとその変遷」菅英輝編『冷戦と同盟：冷戦終焉の視点から』において公表された。

また、研究成果は、戦後欧州におけるアメリカニゼーションの影響について考察を進める必要性を感じさせるものとなった。そのため、欧州社会においてアメリカが表象したものを、社会思想史・文化史的観点からも考察した。特に、トルーマン政権・アイゼンハワー政権における欧州・非欧州を対象にした文化・広報政策の立案過程と、その背後にある理念としての「アメリカニズム」を、1950年代と1960年代の時期を中心に検討した。第二に、同時に、同政策の理念となった「アメリカニズム」の内実が、1950年代のアメリカ社会の変容とともに変化していく過程をあとづけた。

具体的には、1950年代の文化冷戦戦略について考察し、特に音楽を通じたアメリカニズムの発信論理を明らかにした。その結果、自由や民主主義といった価値を表象するアメリカニズムを確認するとともに、その論理が内包する矛盾についても表出した。

このような観点については、主にアメリカ人研究者によって行われた研究の蓄積がある。ただし、それらの既存研究がアメリカ史の文脈から検討を加える一方で、申請者はアメリカの外における「アメリカ」の受容過程についても検討を加えた。その結果、アメリカ政府が発信するアメリカニズムの論理と、アメリカの外で「アメリカ」を受容する論理との間に齟齬が生まれていることが解明された。

特に、フランスや西ドイツ等の西洋諸国では、主に知識人を中心として、アメリカ文化に対する嫌悪感から、アメリカ音楽への抵抗が見られたが、同時にアメリカ文化を受容することで、反米の意思表示の手段に当該文化を用いる事例も検討された。

従来、このような文化発信者と文化受信者との間の齟齬については、カルチュラル・ス

タディーズで論じられて来た。だが、同様の視座が冷戦史あるいは外交史の観点からも重要な示唆を与えることが明らかとなり、それを今後の研究を進める上での重要な分析視角とすることができた。

アメリカニズムの特質と、その史的意義について跡づける作業は、歴代のアメリカ政府が発信したジャズにおけるアメリカニズムとは何か、それを受信する側がどのように理解したか、受信する側の論理と発信する側の論理との間に整合性はあるか、といった観点からの実証的研究を通して進められた。

戦後、ヨーロッパがナチス支配から解放されると、戦前とは比較にならない規模で「アメリカ」が流入した。第二次世界大戦がもたらした荒廃とアメリカのプレゼンスのさらなる高まりは、必然的に19世紀から続くヨーロッパの「アメリカ化」への反発を高めた(1940年代から1980年代にかけての西欧は、反米主義の温床であった)。

まず、1947年に発表されたヨーロッパ復興計画(マーシャル・プラン)を受け入れた西欧で、アメリカの政治的、経済的な影響力が高まった。また、東側の圧倒的な通常兵力を前に西欧諸国は、アメリカに西欧防衛への関与を求め、1949年の北大西洋条約によって安全保障上の関与を約束させた。このような構図からアメリカは「招かれた帝国」と呼ばれるが、その影響力は政治経済的、軍事的領域とあいまって文化的領域においても高まることとなる。

だが、文化的なアメリカはある意味において、「招かれざる帝国」であった。積極的に反米主義に訴える層以外にも、アメリカ文化の流入に反発する人々の数は少なくなかった。西欧の知識人は一般にアメリカは文化を持たないと考えた。よってアメリカにとっては、文化冷戦を優位に進めるためにも自国の偉業を周知する武器が必要だった。モダン・アート、舞台芸術、クラシック音楽といった分野において、アメリカ文化の先駆性や水準の高さが主張され始めた。

アメリカ文化が重視した文化の一つがジャズであった。だがアメリカ文化の水準が低いと考える西欧の知識人にとって、アメリカ生まれのジャズは「アメリカ」を表象するものとは捉えられず、たとえばフランスにおいてはアメリカ国内の人種問題を糾弾する反米的な機能として表出した。ジャズはアメリカニズムを超える存在として受容されたのである。それはアメリカニズムの象徴というより、むしろ反米の意思表示媒体として機能した。専門誌にはアメリカにおける人種差別を糾弾する記事が載り、反核反米運動のデモに際してはジャズが演奏された。つまり、アメリカ政府がアメリカニズムの象徴としてジャズを発信したのとは対照的に、ジャズを受信する側の論理は自律的であり、時にアメリカを超える哲学を提供したのである。このように、起源の地を超えて移ろうジャズの機

能に着目することで、アメリカから発信されるアメリカ文化を受容する側の自発性が明らかになった。

本研究ではアメリカ表象を通して戦後国際政治を検討することも課題としたが、その際には冷戦史を隣接諸分野と接合させながら進めることが不可欠であることが明らかとなった。

これらの研究成果の一部は、単著『ジャズ・アンバサダーズ』として刊行された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

齋藤 嘉臣「帝国の遺産が問うもの」『人環フォーラム』(2014年3月)30-3頁、査読なし。

〔学会発表〕(計 8 件)

齋藤 嘉臣、EU インスティテュート関西(於神戸大学)

題目「文化浸透の冷戦史：イギリスのプロパガンダと演劇性」(2014年2月)

齋藤 嘉臣、イギリス政治研究会(於同志社大学)

題目「文化浸透の冷戦史：イギリスのプロパガンダと演劇性」(2014年3月)

齋藤 嘉臣、アメリカ学会

題目“Covert Propaganda for a Free Europe: The NCFE, CEEC and the Politics of Exile in the United States and United Kingdom” (2014年6月)

齋藤 嘉臣、日本国際政治学会 2014 年度研究大会(於福岡国際会議場)

題目「『イギリスの投影』と文化政策-戦後のブリティッシュ・カウンシルの活動実態とその変遷」部会「文化外交の光と陰」(2014年10月)

齋藤 嘉臣、冷戦研究会(於東京大学)

題目「文化浸透の冷戦史：イギリスのプロパガンダと演劇性」(2015年1月)

齋藤 嘉臣、日本国際政治学会関西例会

題目「国際政治史における複数の『ジャズ』と『アメリカ』」(2015年8月)

齋藤 嘉臣、日本国際政治学会 2017 年度研究大会(於神戸国際会議場)

題目「冷戦とジャズ-「アメリカの音楽」の政治学」部会「冷戦史研究の多角的展開 文化・社会・人権」(2017年10月)

齋藤 嘉臣、神戸女学院大学研究所講演

会

題目「戦後世界とジャズ外交」(2017年11月)

〔図書〕(計 5 件)

齋藤 嘉臣「新しいパブリック・ディプロマシーの系譜」吉川元編『混迷のグローバル・ガヴァナンス：普遍主義と地域主義の狭間で(仮)』(法律文化社、2014年)

齋藤 嘉臣「大西洋同盟の文化的基盤 NATOの発信するテキストとその変遷」菅英輝編『冷戦と同盟：冷戦終焉の視点から』(松籟社、2014年)

齋藤 嘉臣「冷戦と文化的なもの」「アメリカを超えるジャズと冷戦」益田実、池田亮、青野利彦、齋藤嘉臣編『冷戦史を問いなおす：「冷戦」と「非冷戦」の境界』(ミネルヴァ書房、2015年)

齋藤 嘉臣『文化浸透の冷戦史：戦後ヨーロッパにおけるイギリスのプロパガンダと劇場性』(勁草書房、2013年)

齋藤 嘉臣『ジャズ・アンバサダーズ：「アメリカ」の音楽外交史』(講談社メチエ、2017年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

齋藤 嘉臣 (SAITO, Yoshiomi)  
京都大学・人間・環境学研究所・准教授  
研究者番号：10402950

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

( )